



祝 卒業
同窓会入会記念号

令和3年2月26日
(2021年)

編集・発行
島田高校同窓会
〒427-0038
島田市稲荷 1-7-1 修己館内

～同窓会事務局～
TEL/FAX 0547-21-1145
メールアドレス
kawanami@ab.thn.ne.jp

～学校事務室～
TEL 0547-37-2188
FAX 0547-35-1744

同窓生 23,062 名
73回生 198 名
在校生 348 名

コロナを乗り越え
新しい時代を築こう



同窓会長
大久保 節夫
(21回生)

県立島田高校卒業生の皆さんへ卒業おめでとうございます。心よりお喜び申しあげます。まだ寒い日が続きますが、間もなく新しい門出に、旅立ちに相応しい春が訪れます。皆さんはその日を心待ちにして、心躍る気持ちだと思えます。私も自分自身の当手を懐かしく感じております。三年間という長い人生の一瞬に見違えるように立派に成長されたと思えます。勉強、部活動等を通して達成感・挫折感を味わいながら、皆さん自身が学び得た努力の賜物だと思えます。さて、昨年は新年早々から新型コロナ

ウイルス感染症が日本中に、世界中に広がり、日々の生活に甚大な影響を及ぼし、未だに終息が見えない状況にあるかと思えます。皆さんにとっても、高校生活最後の年を大変な思いで過ごされたと思います。しかし、このコロナによって、従来の価値観・生活様式等が大きく変化し、生産性の高い方向に国が向かったと思えます。新しい時代が少し見えて来たのではないのでしょうか。

時間は止まっています、待たなくてもくれませんが、何時も進んでいます。どんな時代でも変化して行く現実を理解して、その中で自分自身の目標に向かって、今出来る事をやって行く事が大切であり、それが多様化した選択肢の多い時代を勝ち抜く事に繋がってくると思えます。島田高校の校訓「希望・友情・努力」をいつまでも大切に、これからの新しい人生を、時代を切り拓いて行き、活躍して行って頂きたいと思えます。そして期待してまします。

川波賞受賞者

○杉本 訓也 (31 HR)

○伊藤 大晴 (32 HR)

○小林 大祐 (32 HR)

男子全国高校駅伝競走大会出場(令和元年度)

○細谷奈津子 (34 HR)

女子全国高校駅伝競走大会出場(平成30年度)
皇后杯第38回全国女子駅伝大会出場
(令和元年度)

○山田 果歩 (34 HR)

全国高校総合体育大会スキー競技出場
(平成30年度・令和元年度)

○池田 悠真 (32 HR)

原水爆禁止世界大会出場(令和元年度)
第22代高校生平和大使長崎派遣代表

○植田 勝也 (33 HR)

高校生生徒会リーダー夏合宿 2019 in 松下政経塾
富士山静岡空港を利用したまちづくり研修会
他多数のボランティアに参加(令和元・2年度)

「川波賞」とは

島高在学三年間に、学業・部活動・学校教育活動において優れた功績のあった生徒に対し、その活動を讃え、卒業時に賞状の授与と記念品を贈呈。

(学校創立90周年を機に創設)

同窓会の活動と主な行事

主な活動は以下の通りですが、新型コロナウイルスの感染拡大状況により、今年の行事の開催は流動的で、日程は確定しておりません。

定期総会開催

毎年8月に定期総会を開催しています。同窓生となる皆さん、ぜひ出席してください。

「島高同窓生の集い」開催

総会終了後、10年ごとの同窓生一同が集まります。同窓生なら誰でも大歓迎ですので、是非ご参加ください。

「六月祭」の参加

各界で活躍する卒業生の紹介や、写真展など、毎年工夫を凝らして参加しています。

同窓会報「川波だより」発行

同窓会活動の報告、恩師や同窓生の近況、女学校時代の元気な先輩の生き方、また島田高校の様子など、興味深い記事が満載です。ホームページで閲覧できます。

在校生支援

充実した学校生活の支援のため、部活動奨励金や奨学金の給付を行なっています。



73回生の学年委員長さん

- 31 HR 佐野泰貴 加賀理子
- 32 HR 樋澤健太 渡邊彩乃
- 33 HR 植田勝也 村松香音
- 34 HR 櫻井竣一郎 北村美雅
- 35 HR 川守光喜 鈴木夏琉亜

よろしくお願ひします



先輩からのメッセージ

同窓会副会長 市川 公 (22 回生)

今年 は 新 型 コ ロ ナ の 影 響 で 最 後 の 島 高 生 活 も 本 当 に 残 念 な 1 年 と な っ て し ま い ま した。今 は、ぐ っ と 押 し 込 め ら れ て 縮 ん で い る 状 態 で す が、コ ロ ナ が 終 息 し た 時 に は 一 気 に 飛 躍 す る た め の パ ワ ー を 貯 め、ジ ャ ン プ す る 準 備 を し て お き ま し ょ う。

出口治朗氏(立命館アジア太平洋大学長)の著書や講演で「人・本・旅」という言葉が良く出てきます。たくさんの人に会い、たくさん本を読み、いろいろなところに出かけていく。人生において人との出会いほど大切なものはない。これからの長い人生の中で、積極的に人と会ってください。出来れば仲良しだけではなく、異質な人との出会いが自分を成長させます。本は言うまでもなく、様々な知識を身に付けることができます。本により歴史を知ることが大切です。人間は未来は予測しかできないが、歴史は事実として認識できる。過去の歴史を知ることにより将来が予測できるといいます。旅も、人との出会い、歴史との出会いがあります。

同窓会理事 権田智子 (29 回生)

『加古里子は女？男？』皆さんはどこらだと思えますか？東京の短大で学んでいた時の学園祭の講演が加古里子でした。学長(女性)の知人だと言うし、里子(さとこ)だから女性だろうと思っていたら：段上に現れたのはおじさんさん』などの作者かこさとし

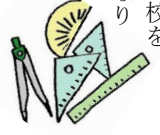


先生です。その後、保育士として多くの絵本に触れ、先生の偉大さが分かり、贅沢な時間がもてたことに感謝しました。これは与えられたチャンスですが、自分から求めてチャレンジすることの大切さを年を追うごとに痛感しています。そしてチャレンジしていません。これで終わりという完成形がなくても人生が豊かになっていると感じています。これから翔く皆さん。多くの出会いを大切に、色々な事にチャレンジして下さい。

卒業後母校を訪れる事はありませんでしたが、息子が野球部に入り足を運ぶようになり、卒業後も公式戦の応援に行き、近年は駅伝応援に行くなど高校との関わりは少しずつ続いていました。ある時、恩師の鈴木先生(前同窓会長)から声をかけていただき、100周年の手伝いをしたことが島高愛に火をつけるきっかけになりました。皆さんも「島高の卒業生で良かった！」と思える日がくることを願っています

同窓会校内理事 石川真男 (31 回生)

私は、四十二年前に島田高校を卒業し、その後高校教員になり七年前に島田高校に舞い戻ってくる事ができました。そしてこの春二度目の島田高校卒業を、末娘とともに迎えることができました。ここに至るまで、「様々な人から刺激を受けてきたことで今日の自分がある」と、しみじみと有難く感じます。その中の一人が、自分が高校教員を目指すきっかけを与えて下さった高校一年生のときの数学担当の田中幸治先生です。もし田中先生に出会っていなかったら、別の人生を歩んでいたかもしれません。大学では「高校数学」と「学問としての数学」に戸惑い、心が折れそうなこともありましたが、「高校の数学教員になる」というぶれ



ない目標を島田高校時代に持つことができただおかげで、今日を迎えることができました。新型コロナウイルスの影響で、行く先が不透明な社会に飛び込んで行くのは勇気が必要ですが、島田高校での出会いから学んだことを活かして、それぞれの目標に向かって力強く第一歩を踏み出して下さい。そして自分を支えてくれる人との偶然の出会いを大切に「Go to 未来！」

同窓会理事 市川 亨 (34 回生)

校歌が大好き！ 先輩諸子、私は島田高等学校校歌が大好きです。今も三番まで空で唄えます。

卒業式で唄う校歌が、同級生全員で唄う最後の校歌になるでしょう。そして、あなたが次に校歌を唄うのはいつになるでしょうか。高校野球の応援スタンドで、京都駅伝応援バスの中で、同級生の集まりで、お酒を飲んで肩を組んで唄うのでしょうか。是非、校歌を忘れないでください。同窓生、初めて会う先輩後輩が唯一心を合わせ一緒に唄えるのが校歌なのです。それが同窓生の証です。母校の校歌は、近隣の中ではピカ者いいです。その歌詞に込められた意味を考えてみると、いつの世でも青春時代の明るい未来が囁望されているようです。



さて私の卒業式は、今から40年ほど前に皆さんと同じ体育館で行われました。成績は決して良くなかったものの、応援団長だったためかクラス代表として登壇させていただき、学校長から卒業証書を授与されたことを今も覚えています。今では現役生が唄わなくなった第一応援歌の歌詞を皆さんの卒業に際し贈ります。

いざ行け島高島高健児

起つべき秋はいま来たる

同窓会理事 武田浩英 (41 回生)

私が高校2年生だった1987年、島高の図書館だよりで村上春樹さんの「ノルウェイの森」のことを知り、よくわからないながらも読み齧ってなんとなく文学青年気取りだった当時の私。その後、「風の歌を聴け」や「羊をめぐる冒険」などの村上春樹作品を適当に読み齧っていました。本当にガツンときたのは28歳の頃にたまたま読んだ「神の子どもたちはみな踊る」という短編集でした。短編集の中の作品たちに、自分これまで良いのかも本当は心の底から救われた気がしたのです。それまで半ばかつこついで文学青年を銜っていただけの私が本当の読書に出会えた瞬間でした。「瓢箪から駒」というか「嘘から出た誠」というか。そしてその前後も含め読み進んでいった司馬遼太郎さんの一連の歴史小説やエッセイ「1Q84」等のその後の村上春樹作品、静岡で講演を聴いた佐々木常夫さんが薦めていた「ビジネスマンの父より息子への30通の手紙」、「驕れる白人と闘うための日本近代史」、「散るぞ悲しき」も大変面白く、あとは漫画ながら手塚治虫さんの「火の鳥」とりわけその中でも「太陽篇」と「乱世篇」は面白い深く、30代を通じて何度も何度も読み返しました。あと、忘れてならないのが宮崎駿さんの「風の谷のナウシカ」ですね。両替町の行きつけのバーでよく会う生臭坊主さんたちによると「火の鳥」と「ナウシカ」は御仏の教えそのものなのだそう。前述の佐々木常夫さんは「私たちは運命に導かれるように出会う。」と、「自身の本の中で書いておられました。私たちの出会いは決して偶然ではない。私達の大好きな一節です。本との出会いもまた然りでしょうか。今はアニメの「進撃の巨人ファイナルシーズン」にハマっています。

